

I C Aパリ大会に参加して

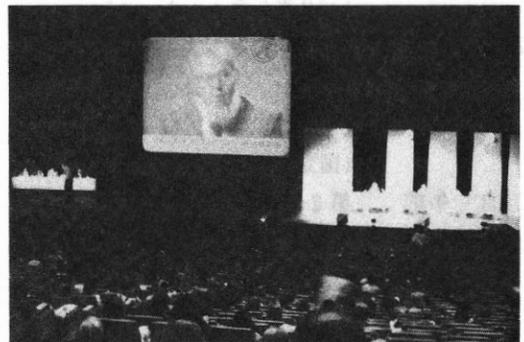
大西 愛

1988年8月22日から1週間にわたって第11回文書館国際会議がパリの国際会議場で行われた。参加者は「5大陸の100国から来た2,000人のアーキビスト」(8月25日付フィガロ紙)でその半数は女性であった。今回の主テーマは、「新しい材質のアーカイブズについて」であったので、大阪府公文書館が当面する問題ではない、はるか進んだ国のことであると感じていた。したがって今回は世界の人々が文書館をどうとらえているかを肌で感じる事ができればと思って参加した。

8月23日、パリの夜明けは夏時間のため日本よりずっとおそく6時40分ごろであった。明けるとすぐ修理中の凱旋門まで散歩した。街路を清掃する人、勤務に出かけるわずかの人のみであった。町なかとはいいいながら緑は豊かで道はゆったりしている。9時に会場に行き受けをすると20数冊もある発表報告が入ったプラスチックケースと関係文書入りの紙袋を渡された。第一セッションの基調報告は「新しい形式の文書の作成と収集」フランス国立公文書館の女性アーキビストであった。また、この日の司会はケニアの国立文書館長の女性であり、全体に女

性の活躍が目立っていた。

発表はそれぞれ得意な言語でなされるが各座席の横に同時通訳のヘッドホンがついており、チャンネルによって選択できるようになっている。もちろん日本語はないので必死になって聞くが、あまりわからない。疲れることおびただしい。途中から会場前の展示を見た。収納用具の見本や古い文書をラミネートする方法、写真の復元、コンピュータ処理などを実演していた。



会場風景

8月24日のテーマは、「新素材によるアーカイブズの保存について」で、保存条件・技術について論じられた。少し会場の雰囲気にもなれた。しかし入口でバッグをチェックされたり、昨日

と何か違うかたくるしい空気があると思つてると、会議のあとで仏大統領ミッテランが来会して演説した。これはどうしても聞いておかなければと耳をかたむけた。「このアーキビストの仕事は、世界の財産としての文書に価値づける重要な仕事であるから、あなた方の努力と忍耐に敬意を表します」という風に聞けたので、ちょっと感激した。

この日の夕刻、ベルサイユ宮殿でレセプションがあった。2,000人以上の人々が招待され、中には民族衣装などで華やかに会が始まった。私は安沢氏御夫妻や安藤氏の紹介で数か国の人々と会話を交わすことができた。中でも東南アジアの人々からは、文書館の施設や組織、そして専門員の養成も日本より、ずっと進んでいる様子を聞くことができた。ヨーロッパより近い国々の事情をもっと知りたい、一度行ってみたいという思いにかられた。11時から花火があるというので待っていると壮大な庭園に美しい音楽が流れ、宮殿をとりかこむ森、点在する噴水をとり入れて、花火と照明、煙と水のかなでる野外芸術がはじまったのである。ヨーロッパ人のふところの深さ、「文化」に惜しみもなくつぎ込む豊かさに圧倒された。「日本は少しも豊かでない」と感じた。

8月25日、昨日のミッテランの演説が新聞に出ていると聞いたので、さっそくホテルの向い

のキヨスクで、そんな記事の載っている新聞はどれかとおじさんに尋ねたが、言葉がうまく通じなかったのか、おじさんが知らなかったのかとにかくわからないという。それで手あたり次第に買って帰るとフィガロ紙だけに載っていたので、もう一度昨日の感激を味わおうと読み返した。

私はこの日の会議を最後にパリを発ち、ブラッセル方面を旅行することになっていた。この会議の間に、テーマである新素材のアーカイブズ—映像やオーラルのもの、コンピュータなど—について、やはり私たちも早急に考えなければならないと実感するようになった。むしろ紙の文書より保存期間は長くはない。紙の文書の収集整理がまだ十分に出来ていないという理由でこれら新素材のものをないがしろにはできない。紙文書が作成された当時に保存のことを考えていれば今のように収集に走りまわることにはなかったのである。同じ「あやまち」をくり返さないためには、今このことを考えておかなければならないのではないか。しかも、こういう素材は、新しいもの好きの日本人が世界をリードして使用しているのである。パリ北駅からブラッセル南駅への3時間の列車の旅の間、そのことを痛切に感じたのであった。(1988. 11. 25)

(大阪府公文書館)